

看護系社会人大学院生の 修士論文作成における学びの過程

中村 恵子 菅原真優美 渡邊タミ子

新潟青陵大学大学院看護学研究科

Learning process in writing of a master thesis by nursing-related adult graduate students

Keiko Nakamura Mayumi Sugawara Tamiko Watanabe

Graduate School of Nursing, Graduate School of Niigata Seiryō University

要旨

本研究は、看護系大学院に在籍する社会人大学院生の修士論文作成における学びの過程を明らかにするとともに、学びを促進する要因および阻害する要因を抽出することを目的とした。A看護系大学院の修士課程を修了した社会人大学院生のうち、調査協力に同意を得た修了生9名を対象として、半構造化面接法を行った。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて面接内容を分析した結果、22の概念から6つのカテゴリーが生成された。

修士論文作成において、社会人大学院生は、一連の《探究への足踏みと打開》を経験していた。その要因として、＜主体的学習への変換と推進＞、＜他者との関わりから生ずる促進と停滞＞、＜研究環境の良否による進展と難渋＞、＜限られた時間と経験による強み・弱み＞が生成され、学びを促進する要因でもあり阻害する要因でもあるという両面が見られた。修士論文を完成させた経験を活かし、＜学びの活用・発展＞がなされていた。

キーワード

看護系大学院、社会人大学院生、修士論文、学びの過程

Abstract

The purposes of this study are to reveal the learning process in the writing of a master thesis by adult graduate students attending a nursing-related graduate school and also to identify the factors both encouraging and limiting such learning process. The semistructured interview method was used with the nine adult graduate students who had completed their master course in a nursing-related graduate school and given their consent to cooperate with the survey. Then, the analyses of the data obtained through the said interview employing the modified grounded theory generated six categories out of twenty-two concepts.

In writing their master thesis, the adult graduate students experienced a series of 《Standstill and breakthrough toward research》. <Conversion to independent-minded study and driving forward>, <Promotion and stagnation arising from interrelating with others>, <Progress and difficulty due to quality of research environment> and <Strengths and weaknesses with limited time and experience> were generated as its factors and it was observed that they were not only the factors promoting the learning but also those limiting it. Taking advantage of their experience of having completed a master thesis, the adult graduate students engaged in the <Use and Development of Learning>.

Key words

nursing-related graduate school, adult graduate students, a master thesis, learning process

I 緒言

近年、医療の高度化、高齢化および生活習慣病の増加に伴い、人々の健康に対するニーズが高まり、その期待に応えることのできる高度な知識と専門技術をもつ質の高い看護職が必要とされている。こうした社会的要請を受けて、平成4（1992）年に「看護師等の人材確保の促進に関する法律」が制定された。看護ケアを必要とする人々に、専門職として自律した看護を適切に提供し、看護学の専門性をより発展させるには研究能力を有する人材育成が重視されている。

長期履修学生制度等の活用により、働きながら看護系大学院で学ぶ看護職者の割合が増加している。看護系社会人の大学院生の入学動機には、「看護実践能力の向上」、「臨床看護継続の葛藤」、「看護研究の実践」等があることが報告されている¹⁾。一方で、これらの社会人大大学院生の学習上の課題として、「学習者としての自信の獲得とやる気の維持」、「内的外的学習環境の整備」、「学習継続のための生活スタイルの再構築」、「職業人としての確かな役割遂行」等が存在することが明らかにされている²⁾。同様に、阪本は、働きながら学ぶ学生の仕事と学業の両立の要因について、「本人の努力」、「院生同士や教授のサポート」、「職場の上司や同僚の配慮」、「学ぶ喜び」、「家族の負担と協力」、「本人の健康管理」を挙げている³⁾。以上から先行研究において、看護系社会人の大学院生には問題意識に基づく学習への動機づけがあると同時に、社会人としての役割遂行と大学院での学修を両立させるための課題が存在していることが示されている。他に、中山らは博士論文作成過程の経験⁴⁾を、金谷らは修士論文作成過程の経験⁵⁾を明らかにしているが、社会人としての学習過程に限定していない。

看護系大学院において修士論文を作成するには、「課題の明確化」、「研究計画書の作成」、

「倫理審査の申請」、「データ収集・分析」、「研究結果の表現」、「論文作成」、「修士論文提出」という過程がある。それぞれの過程の中で、大学院生は主体的に研究テーマを追求し、教員や大学院生同士の関わりを通して、自らの学びを深めていく。一方で、社会人大大学院生は、職業人としての生活を維持しながら、その他の時間で大学院生活と個人生活を組み立てなければならぬため²⁾、研究が計画通りに進まない場合も散見される。これまで、社会人大大学院生の学びの過程に焦点をあてた研究は行われていない。

大学院生の修士論文作成における学びのプロセス並びに関連要因を明らかにすることで、これからの大学教育のあり方についての貴重な資料を得ることが期待される。また、大学院を修了した大学院生がさらに研究を推進し、看護学をより発展させるための人材育成にも繋がるものと考えられる。

そこで、本研究では、看護系大学院に在籍した社会人大大学院生の修士論文作成における学びの過程を明らかにするとともに、学びを促進する要因および阻害する要因を抽出することを目的とした。

II 研究方法

1. 用語の定義

本研究では、「社会人」を「保健・医療・福祉施設、教育・研究機関等で3年以上の実務経験を有する者」と定義した。

2. 研究対象者

A看護系大学院の修士課程を修了した社会人大大学院生のうち、面接調査への協力の同意を得た修了生9名である。

3. 研究期間

平成30年3月～5月

4. データの収集方法

同意を得た対象者の要望に合わせて面接の日時と場所を決めて行った。調査方法は半構

造化面接法で、インタビューガイドを踏まえて、プライバシーを確保できる個室で実施した。面接時間は約1時間/1人で、平均66分であった。主な面接内容は、取り組んだ研究課題と研究目的・方法、修士論文作成における学びの過程、その学びの過程における促進要因や阻害要因等についてであった。対象者の許可を得て、語りの内容をICレコーダーに録音した。

5. データの分析方法

木下が開発した修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA)⁶⁾を参考にして分析した。木下が提示しているM-GTAを使用するかどうかを判断するための重要なポイント⁷⁾を鑑みて、仲間や職場のスタッフ、指導教員等との社会的相互作用に関する研究であること、修士論文作成における学びの過程を明らかにすることを研究目的としていること、研究結果を修士論文指導という実践現場に戻して能動的に応用することにつながる研究であることから、M-GTAが適していると判断した。分析焦点者は、「社会人として看護系大学院修士課程に入学して、修了した者」とした。分析テーマは、「研究課題の明確化から修士論文の作成に至るまでの研究過程において、分析焦点者がどのように取り組み、どのようなことが助けとなったり妨げとなったりしたのかなどの一連の学びの過程」とした。

分析の手順は、まず、録音したインタビュー内容から、逐語録を作成した。次に、1例目の分析には、分析テーマと照らして、バリエーションの豊富である事例を取り上げ、逐語録データを熟読し、分析テーマに関連する箇所に着目した。それらのデータが、分析焦点者の観点から何を意味するかについて慎重に解釈し、その意味を忠実に表現できるように研究者間で合意できるまで検討を重ねた。概念生成における分析作業は、分析ワークシートを活用して、概念名とその定義、具体例、

理論的メモを記載し、シートごとに1概念を生成した。その際、既に生成した概念と類似していない概念や対極の概念がある場合には、その意味を解釈し、概念間の関係性について検討した。2例目以降も、対極比較、類似比較の観点から分析を進め、分析過程や解釈が恣意的にならないようにした。9名の分析終了以降新たな概念は生成されず、一連の学びの過程を説明できると判断した。次に、生成された概念間の関係を考え、カテゴリーを検討した。生成されたカテゴリーが、社会人大学院生の研究過程において、どのような学びの過程に位置づくのか、またそのカテゴリーがどのような動きの説明になるか、さらにコアカテゴリーは何かについて検討した。そして、各カテゴリーの関係性を包括する結果図を作成し、分析テーマに関わるストーリーラインを文章化した。概念の生成からストーリーラインの作成に至る過程において、M-GTAの研修会参加や研究経験のある共同研究者、大学院におけるM-GTAの研究指導経験をもつ共同研究者間で、継続的に検討を重ねた。

6. 倫理的配慮

調査対象者に研究目的・方法、自由意思による参加の保証、参加による不利益がないこと、匿名化による個人情報・プライバシーの保護、答えない自由や研究参加の撤回可能性、許可を得た上での録音等を文書と口頭で説明した。研究への参加意思を確認し、書面による同意を得て実施した。

なお、本研究は、新潟青陵大学倫理審査委員会の承認 (No.201714) を受けて実施した。

III 結果

1. 研究対象者の概要

研究対象者の9名は男性1名、女性8名で、30歳代1名、40歳代4名、50歳代3名、60歳代1名であった。医療機関において、看護職

で勤務する者がほとんどであった。

2. 分析の結果

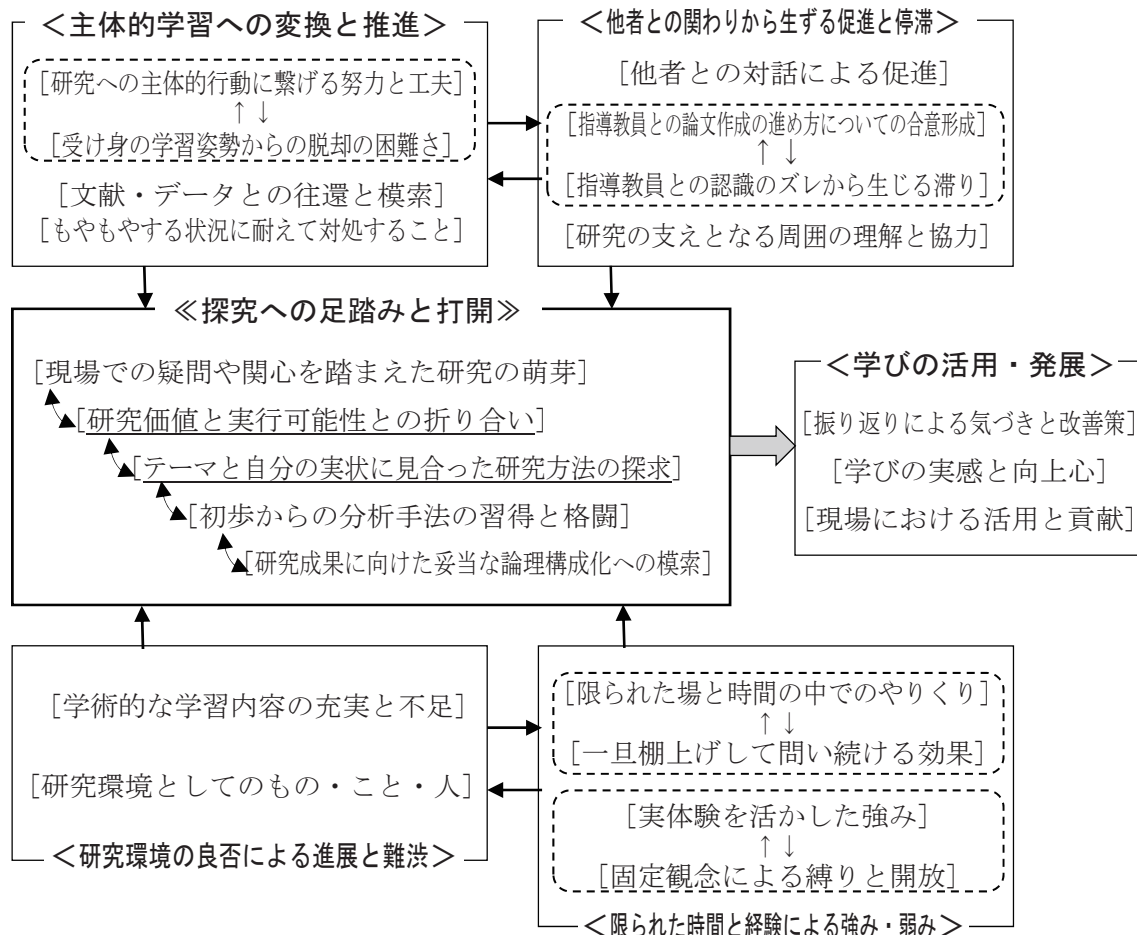
本研究では、22の概念から6つのカテゴリーが生成された。その結果図を、図1で示した。なお、《》はコアカテゴリー、<>はカテゴリー、[]は概念、ヴァリエーション（具体例）は「 」で表した。

1) ストーリーライン

図1の結果図を踏まえたストーリーラインは、次のとおりである。まず、《探究への足踏みと打開》は、[現場での疑問や関心を踏まえた研究の萌芽]を出発点として、特に[研究価値と実行可能性との折り合い]を図り、[テーマと自分の実状に見合った研究方法の探求]

を行って、研究デザインを描いている。[初歩からの分析方法の習得と格闘]を通してデータを分析し、[研究成果に向けた妥当な論理構成化への模索]を行っている。

[研究への主体的行動に繋げる努力と工夫]は<主体的学習への変換と推進>の元ではあるが、従来の[受け身の学習姿勢からの脱却の困難さ]から、主体的な学びが阻害される可能性もある。学びの広がりや深まりは、自分と[文献・データとの往還と模索]によってもたらされる。その間は、それぞれがもつ[もやもやする状況に耐えて対処すること]によって、何とか乗り越えようとしている。<他者との関わりから生ずる促進と停滞>において



注:

《》はコアカテゴリー、<>はカテゴリー、[]は概念を示す。

⇒は変化の方向、→は影響の方向を示す。

-----内は、対立概念を示す。

図1 看護系大学院の社会人大学院生の修士論文作成に至るまでの学びの過程

は、仲間や職場のスタッフ、指導教員等の「他者との対話による促進」が重要である。「指導教員との論文作成の進め方についての合意形成」がなされていると、論文作成を進めやすくなる一方で、「指導教員との認識のズレから生じる滞り」に陥ることもある。職場の上司や同僚、家族、友人といった「研究の支えとなる周囲の理解と協力」は大きな励ましとなっている。「学術的な学習内容の充実と不足」、「研究環境としてのもの・こと・人」といった「研究環境の良否による進展と難渋」も、論文作成の作業状況に影響を与えている。

「限られた時間と経験による強み・弱み」として、「限られた場と時間の中でのやりくり」で論文作成しなければならないことがある。しかし、そのことが考えを熟成させたり変換させたりする「一旦棚上げして問い続ける効果」につながる面もある。また、テーマの設定や結果の解釈において、社会人としての「実体験を活かす強み」が発揮される一方、「固定観念による縛りと開放」の姿も認められる。

「学びの活用・発展」には、「振り返りによる気づきと改善策」、「学びの実感と向上心」、「現場における活用と貢献」が挙げられる。

2) 各力カテゴリーとその概念

(1) 「探究への足踏みと打開」カテゴリー

「探究への足踏みと打開」は、現場での疑問や関心を出発点として、研究価値と実行可能性との折り合いを図って、テーマや研究方法等について研究デザインを描き、格闘や模索しながら修士論文を作成していく学びの過程を表すカテゴリーである。以下の5つの概念で構成されていた。

まず、「現場での疑問や関心を踏まえた研究の萌芽」は、現場の看護活動を通じて疑問視したり興味・関心を抱いたりする事象について、学術的にアプローチしたいという芽生えを示す概念である。主な具体例として、「その仕組みに関して効果はあったんだけど、その現象を説明できない」や「うまく活動で

きないし、こう、悩みも多いのに、やっぱりこう活動を継続するっていうことは、まあ、モチベーションが高いんだろうな」等の語りで示されていた。

次に、「研究価値と実行可能性との折り合い」は、興味・関心をもつ研究的疑問から研究的意義を見出し、それに対する研究の実行可能性に向けて検討を重ね、折り合いをつける知的作業を表している概念である。主な具体例として、「これにも興味がある、あれにも興味があるみたいな感じで、すごく1つに絞りきれなくて」や「面白いじゃないと思いつながら、はい。で、それを看護にもってこれるかどうかって辺りで、ちょっと右往左往しました」等の語りで示されていた。

「テーマと自分の実状に見合った研究方法の探求」は、研究課題を踏まえつつ、自分の能力や性格等の特性や現状を考慮して、研究方法を探し求めることを示す概念である。主な具体例として、「関連性がどうなっているのかっていうようなところを見たいなと思ったので、今回は、その質的統合法っていうので、まあ、KJ法ですかね」や、研究方法を決定する際に、「(略) アンケートを作っていくっていうところの自信もちょっとなかったです」、「質もすごく授業でやって楽しそうだなとは思ってたんですけど、(略) 何回か研修会に行ったりしないとちゃんとしたことができないうのかなというふうに思いました」等の語りで示されていた。

「初歩からの分析方法の習得と格闘」は、文献活用や研修会参加、指導教員のアドバイスにより、初歩的な段階から妥当な分析手法を習得するために懸命に模索する取組を表現する概念である。主な具体例として、「統計も授業で受けて、そのとき初めてSPSSも使って、もともと数学も統計も苦手なほうなので、(略)、まるっきり本頼みでやりました」、「研修会を年に何回もやってたりとかして、で、一番最初に行ったのかな、行ったのが、土日

丸々2日間、「先行文献まねしたり、まあ、参考にしたりして、同じようにやってみても、(略)これでいいんだと思ってずっと時間かけてやって、あれってというのがあって。そういうときはやっぱりちょっと切なくなりました」等の語りで示されていた。

〔研究成果に向けた妥当な論理構成化への模索〕は、研究計画に基づいて生成された分析結果や考察に対して、適切で妥当な論理構成化に向けて、寄る辺なく模索する困難な状態を示す概念である。主な具体例として、「コンピューターの操作とその出た結果がこう、何をこれを明らかにしているのかというのの解析がやっぱり自分の中でうまくできない」、「視点が決まるまでは、どういう切り口で述べていくのかみたいなのが決まるまでは、またちょっと悩んで。(略)何か何パターンも書いた気がするんです」、「根拠を書かないと駄目なんですよ。正しいことを書かなくてはならないなっていう思いがあったので、(略)それが正しいんだろうかっていうのを調べるのが時間かかって」等の語りで示されていた。

(2) <主体的学習への変換と推進> カテゴリー

<主体的学習への変換と推進>は、主体的に学ぶために、努力や工夫をしたり、模索したりすることを示すカテゴリーである。以下の4つの概念で構成されていた。

〔研究への主体的行動に繋げる努力と工夫〕は、研究に対して主体的に取り組むために、認識や行動において努力し工夫することを表す概念である。主な具体例として、「主体性というか、(略)自分で必要だと思ったものに関しては、自分から、こう、求めていく」、「自分が興味が湧かないと、多分この先のプロセスを踏めないだろうなって」等の語りで示されていた。

〔受け身の学習姿勢からの脱却の困難さ〕は、大学院での自己の学習姿勢に対する認識の甘

さに気づき、研究活動を主体的に取り組めるように脱却することの難しさを表す概念である。主な具体例として、「自分で学ぶ。多分私の中ではね、困難だったんだと思うんです。あの、義務教育、座学、教えてもらう、(略)それがやっぱりこう、抜けないというか。学んでいこう、解明していこうっていうところが多分弱かった」等の語りで示されていた。

〔文献・データとの往還と模索〕は、研究のテーマや方法を決定したり結果や考察について検討したりする際に、文献やデータを吟味することと自分で熟考することを行ったり来たりして、模索を重ねることを表す概念である。主な具体例として、「とにかく論文を、要旨をとにかく読み込んでいって、あの、それしかなかったです。やり込んでいく、手掛かりにして、そこからまた広げて、で、また戻ってきてっていう、その繰り返しで」、「分析方法は、あの、先行文献とまずは同じ方法でやってみよう」、「自分が変わるじゃないですけど、自分の考えを深めるっていうか、自分の考えが正解じゃないんですけど、何かより良くなるために読む」等の語りで示されていた。

〔ももやする状況に耐えて対処すること〕は、行き詰ったりストレスを感じたりしてもももやする状況を、行動や考え方、助け合いなどによって耐えてやり過ごす力を示す概念である。主な具体例として、「自分だけで抱えて、何かこうバーンアウトみたいな感じにはあまりならないので。(略)どこかでそうですね、発散はしていたのかな。(略)何かももやして、まあ、解決しないこともあるんですけど、まあ、1つでも解決するように、こう、やっていきたいなと思う」、「混沌とした中でも、その、楽しむことができるっていう強みはありますよね。(略)今までの経験上、いつか晴れたときに、あの、すっきりするぞってのが分かるので」等の語りで示されていた。

(3) <他者との関わりから生ずる促進と停滞>カテゴリー

<他者との関わりから生ずる促進と停滞>は、仲間や指導者、職場のスタッフ等の他者との関係が、研究に大きく影響していることを表すカテゴリーである。以下の4つの概念で構成されていた。

〔他者との対話による促進〕は、仲間や指導者、職場のスタッフ等の他者と対話することで、新たな気づきがあったり考えが明確になったりして研究が促進されることを表す概念である。主な具体例として、「院生同士で教え合ったりしながら乗り越えたのが、やっぱり一番大きかったかなと思います。(略)こういうやり方でやったとかっていう、その情報交換ですかね、それがすごい、あの、役立ちました」、「自分の頭だけで考えていると何か妄想のような感じになってしまうので、(略)やっぱり指導教員がいて、そこでやりとりをすることで、何かこう、はっきりしてくる」、「職場の部長と師長と別々にまあ、あの、自分の考えとして、(略)ここにはこういう意味があるっていう話をするのでちょっと整理ができて」等の語りがあった一方で、「もっとこういういろんな意見も聞いて、聞いたりできる場面があるとよかった」等の語りで示されていた。

〔指導教員との論文作成の進め方についての合意形成〕は、論文作成をどのように進めていくのか(指導内容、コミュニケーションの取り方、やりとりの頻度等)について指導教員と学生の間で合意形成がなされることを示す概念である。主な具体例として、「方法のところとか、結果のこう表し方とか、こう、したんですけど、考察のところはあんまり何かこうしなさいっているふうに、何かあんまり言われなかった気がして、うん、悩みながら書いて、本当にでもよかったのかなみたいな感じですよ」、「多分それが、私のスタンスがそうだったと思うんですけど、自分で調べ

て調べて納得しないと多分動けないんですよ。(略)具体的に次こうしたほうがいいとか、方法はこういう手順でとか。(略)そこは、あの、しっかりと指導いただいている」等の語りで示されていた。

〔指導教員との認識のズレから生じる滞り〕は、教えたいことと教えてもらいたいこと、学生自身に考えてほしいことと学生自身が自分で考えたいことといった指導教員と学生との認識がズレていることにより、研究が停滞することを表現する概念である。「ちょっと先生には、こう、相談に、これで悩んでいますっていうふうな相談にはいけなかったです。みんな何もこう、全部自分でやるのよっていう感じだったんですね」、「肯定を勧めてる先生だったから、否定は絶対しないっていう先生だったんで、まあ、それに甘んじてたっていうか。(略)やっぱり進みが、テーマも決めない、絞れなくてっていうのはあって」等の語りで示されていた。

〔研究の支えとなる周囲の理解と協力〕は、職場の管理職や同僚、家族、友人といった周囲の人々が、論文作成について理解を示してくれたり協力をしてくれたりすることを示す概念である。主な具体例として、「院に来ること自体を職場で、あの、肯定してくれるっていう環境はすごく必要だってやっぱり思います」、「修論も書いて、家の中のこともとかって、全部を1人で、やっぱりやるってことは難しいと思うので、やっぱり協力がなければできないところだと思う」等の語りで示されていた。

(4) <研究環境の良否による進展と難渋>カテゴリー

<研究環境の良否による進展と難渋>は、カリキュラムや、物的・人的研究環境が、研究を支える要因であることを示すカテゴリーである。以下の2つの概念で構成されていた。

〔学術的な学習内容の充実と不足〕は、カリキュラムにおいて、看護学だけでなく学び

となる学習内容が充実していることや、論文作成にあたって必要となる学習内容が十分ではないことを示す概念である。主な具体例として、「基礎教育、あの、本当に基礎的なものだけではなくって、福祉って辺りの領域で、あの、心理学もそうでしたし、だから、そういうところを、あの、こう、カリキュラムの中に入っているのはやっぱりいいですよね」、「こういうテーマにはこういう統計処理の方法がいいよっていうのを聞いた後で、データ集めた後にもう1回統計処理の講義があると、何か全然訳分らない、1年生で多分取ったと思うんですよ、1年目で。(略)自分でやっぱりやってみて、聞くのとやっぱり違うなと思って」等の語りで示されていた。

〔研究環境としてのもの・こと・人〕は、コンピューターやソフト等の必要となる物品の整備や、論文作成のための調査費等の経済的負担など、研究を支えるための環境に関わる状況のことを示す概念である。主な具体例として、「研究室の何かこう、ありがたさみたいなのはすごいありました」がある一方で、「時間が6時までなので、仕事が終わってから来てからだと閉まっていることが多くて」、「プリンターがよく壊れたっていうか、紙がないときとか、(略)パソコンが壊れたときもあったり、あと、メモリーが、研究のメモリーが一式全部消えたときがあって、あれは泣きました」、「お金かかりました。自費ですよね」等の語りで示されていた。

(5) <限られた時間と経験による強み・弱み>カテゴリー

<限られた時間と経験による強み・弱み>は、社会人大学院生であるが故の大変さや困難さとともに、社会人大学院生ならではのよさや強みがあることを示すカテゴリーである。以下の4つの概念で構成されていた。

〔限られた場と時間の中でのやりくり〕は、仕事や社会活動と研究活動を同時に遂行するための時間を確保することの困難さや余裕の

なさを示す概念である。主な具体例として、「職場の方の活動、現場の仕事もすごく忙しくて、あの、なかなか通えない」、「なかなか先生と予定が合わなかったりっていうような感じで、もう最後の1カ月は結構大変でした」等の語りで示されていた。

〔一旦棚上げして問い続ける効果〕は、仕事との両立が困難な場合に研究活動を一旦棚上げしつつも、思考を巡らせながら研究テーマを深めていく姿を示す概念である。主な具体例として、「忙しいとちょっとしばらく手が付けられないとかいうこともあって、でも、完全に忘れるわけではないので。(略)やっぱり常に何か考えているんですよ。(略)寝かせるってわけじゃないですけど、うん、まあ、そういう時間が取れた」等の語りで示されていた。

〔実体験を活かす強み〕は、過去の研究テーマおよび自分のキャリアを実体験の強みとしながら研究活動を促進させている様子を表現する概念である。主な具体例として、「実体験で、えっと、モチベーションとつながったのかなと思います。なるほど感のほうが強かったですね。ああ、やっぱりねっていつてこう、思いました」等の語りで示されていた。

〔固定観念による縛りと開放〕は、研究活動を進める過程で、今までの経験から得ていた自己の価値観を変化させ、新たな価値観を獲得したことを示す概念である。主な具体例として、「最初にやっぱり自分がこだわってたんだと思うのは、その、何年間かずっと職員満足度調査をやってきたので。そこから抜け出せなかったんですね」、「実体験、その、自分の置かれているところ、環境のイメージが強すぎて、まあ、もしかしたらこう、何ていうんですか、偏った解釈になってないかななんて心配はしました」等の語りで示されていた。

(6) <学びの活用・発展>カテゴリー

<学びの活用・発展>は、以下の3つの概

念で構成されていた。修士論文作成において得られた学びを活用したり発展させたりすること示すカテゴリーである。

〔振り返りによる気づきと改善策〕は、修士論文作成後に自分を客観的に振り返ることによる気づきや、論文作成をスムーズに進めるために必要な課題が得られたことを示す概念である。主な具体例として、「全然つながってなかったんです、私の中で1年目と2年目が。(略)終わってしまえば、あ、全部つながってたなっていうのが分かります」、「勉強するのが好きだったんだなっていうふうに思いました。(略)今でもその、勉強をするというか、学ぶというのを継続できているので、やっぱりそれは大学院に来たことがすごいきっかけになっているのかな」、「どの時期にどこまでやったらこう、たどり着くのかっていうところが、(略)そこがもう少し自分の中で理解できていれば、もっとこう早く始められたんじゃないかなっていうのはありましたね」等の語りで示されていた。

〔学びの実感と向上心〕は、修士論文を作成することで得られた専門分野に対する自信、自己肯定感を土台にして、看護を探究する意欲を高めている状態を表す概念である。主な具体例として、「看護を学問的に学びたいとか、その客観的に何ですかね、その、捉えたいとかっていうようなところからだったので、まあ、その目的はある程度は果たせたのかなと思います」、「学びもそうですし、人間関係もそうですし、あの、授業も本当に1つ1つ参加型で、うんと、視点、自分の、あの、小さい視点が本当に広がって行って、視野がどんどん広がっていける機会も得た」、「看護に関してもうちょっと、あの、どんどんこう、プラスになるようにしていかなきゃいけないっていうところで気づきっていうか、もうちょっと研究を進めたいなっていう気持ちになりました」等の語りで示されていた。

〔現場における活用と貢献〕は、自分の経

験を生かし、自信をもつて他者に研究指導したり、日常の仕事においてアドバイスしたりしている状況を示す概念である。主な具体例として、「自分で書く前よりは、あの、具体的なアドバイスがスタッフにできるようにはなりました。(略)相手が看護師ではない看護学生に教えにいくようになってからは、(略)これを考えさせるにはどうすればいいんだらうって思いながらやるようになりました」、「先行研究でこういったことがあってっていう、スタッフにこう、そういったものを知らせたり、こういうヒントになるから見てとかっていうところにこうすごい、(略)そこはすごい役に立っているなって思います。実際に、まあ、仕事をしてても、あの、同僚であるとか、えー、その、スタッフの方に対しても何かこう、頑張っていることを認めることができるようになったっていうのは実感として感じています」、「看護研究とか、新人指導、新人指導とか、実習指導とか、まあ、いろんなことを全部していかななくてはいけないことになっていて。(略)研究のまとめ方とか、文献検索の仕方とか、そういうのは研修会でみんなに伝えていけて、それは良かったなと思っています」等の語りで示されていた。

IV 考察

1. 修士論文作成における学びの過程

〔現場での疑問や関心を踏まえた研究の萌芽〕、〔研究価値と実行可能性との折り合い〕、〔テーマと自分の実状に見合った研究方法の探求〕、〔初歩からの分析方法の習得と格闘〕、〔研究成果に向けた妥当な論理構成化への模索〕といった一連の《探究への足踏みと打開》の中で、特に、〔研究価値と実行可能性の折り合い〕と〔テーマと自分の実状に見合った研究方法の探求〕に基づく研究デザインの決定までが、学びの重要なポイントとなっていることが示唆された。成人教育の観点から

みると、学習への方向づけは教科中心的なものから課題達成（performance）中心なものへと変化できるように支援し、学習目標や内容、方法等を含めて自己決定の増大を図れるようにする必要がある⁸⁾。自己決定の増大を図るには、《探究への足踏みと打開》の研究過程において、社会人大学院生のレディネス状態を把握し、課題となる事柄を共有し、支援を行うことが求められる。

〈学びの活用と発展〉では、研究過程を修了したことによって、さらに看護行為について省察し、向上心をもって職場で学びを活用して役割を果たし、看護専門職業人としての自己効力感を高めていることが示唆された。

2. 学びの促進要因および阻害要因

《探究への足踏みと打開》において、[他者との対話による促進]が、最も大きな学びの促進要因となっていた。これらのことから、[研究価値と実行可能性の折り合い]と[テーマと自分の実状に見合った研究方法の探求]といった段階において、大学院生同士や先輩、指導教員等の他者との対話が十分になされることが学びを広げたり深めたりする上で重要である。星野らは、同期生との交流の中では、情報交換の役割や、同じ目標をもつ仲間として互いを高め合う役割、そして励まし合い精神的な支援者としての役割があると指摘している⁹⁾。臨床における看護の経験を有する者同士だからこそわかりあえる部分があり、精神的な支援に基づく対話の促進が学修の促進要因に繋がっていると考える。他者との対話が十分でなかったと感じている大学院生もいたことから、意図的に対話の場を設定する必要がある。

また、学びの促進要因としては、[研究への主体的行動に繋げる努力と工夫]や[もやもや状況に耐えて対処すること]といった大学院生側の要因が挙げられる。悩んだり分からなかったりするときには、様々な場面で[文献・データとの往還と模索]によって、困難

な状況を乗り越えていた。青山らは、大学院修士課程における学習経験の特徴は時間をかけて文献検索し、多くの文献や論文を読む機会を得て、これまで知ることのなかった理論や幅広い知識を学び、物事を深く広く捉えることと述べている⁹⁾。本研究においても同様に、修士論文作成に必要な文献から幅広い知識や技能を得ることで、学びを促進させていることがみとめられる。

さらに、[指導教員との論文作成の進め方についての合意形成]、[研究の支えとなる周囲の理解と協力]といった他者との関わりや、〈研究環境の良否による進展と難渋〉も大きな促進要因となっている。

一方、前述の促進要因が十分でなかったりすると、学びが滞ることにつながる。学びの阻害要因としては、[受け身の学習姿勢からの脱却の困難さ]や[指導教員との認識のズレから生じる滞り]、〈研究環境の良否による進展と難渋〉が挙げられる。特に[指導教員との認識のズレから生じる滞り]では、修士論文の作成過程で一人の教員とのやりとりで滞りが発生した場合、大学院生には逃げ場がない状況に置かれやすい。金谷らは、看護系大学院における修士論文作成過程の経験について、「学生が受け入れられない指導とは、過剰な指導、実現不可能な指導、適切であると確信できない指導などであった」⁹⁾と述べている。また、シャラン・Bらは、教授の役割をもつ人が及ぼす影響の鍵となるのは学習者と築く信頼関係であると強調し、その中心的仕事は「活動するためにふさわしいミクロカルチャー、雰囲気、居場所」を創りあげることであると示している¹⁰⁾。そして、渡邊は、成人教育における学習者と教育者の相互の関係性について、「対等性」、「共感性」、「協同性」、「相互性」、「啓発性」が重要であるとしている¹¹⁾。そのため、指導教員は大学院生との信頼関係を土台として指導にあたり、予め複数教員での指導体制を構築したりして、滞

りに対応する必要がある。

[限られた場と時間でのやりとり] は多忙であることの弊害だけでなく、[一旦棚上げて問い続ける効果] にもつながっている。

[実体験を活かした強み] は社会人学生ならではのよさであるが、[固定観念による縛りと開放] についての認識もなされていた。〈限られた時間と経験による強み・弱み〉には、メリットとデメリットとの両面があることが分かった。

これらのことを活かして、研究活動に関わる学びの過程を支えらえるように、大学院修士課程における社会人大学院生の教育の改善点につなげていくことが肝要である。

V 結論

看護系大学院の修士課程を修了した社会人大学院生を対象にした半構造化面接法で調査した結果、以下のことが明らかになった。

1. 学びの過程

社会人大学院生の修士論文作成における学びの過程として、現場からの研究萌芽、研究価値や実行可能性との折り合い、実状に見合った研究方法の探求、初歩からの分析手法の習得と格闘、研究成果に対する妥当な論理構成化の模索の5つの概念で構成されていた。

2. 学びの促進要因および阻害要因

主な促進要因は他者との対話や主体的行動に繋げる努力等の概念であり、主な阻害要因は指導教員との認識のズレや限られた場と時間での調整等の概念であることが明らかになった。

本研究の限界として、A看護系大学院の修士課程を修了した社会人大学院生のみを対象としていることが挙げられ、今後の課題として、他の教育機関も視野に入れ、検討していく必要がある。

なお、本研究は、平成30年度新潟青陵大学大学院共同研究費の助成を受けて行ったものである。

謝辞

本研究にご理解とご協力をいただきましたA看護系大学院の修士課程を修了した社会人大学院生の皆様に、深く感謝いたします。

文献

- 1) 馬場貞子, 村中陽子. 看護系大学院修士課程社会人学生の特性と学習ニーズに関する研究. 日本看護医療学会雑誌. 2011; 13(2): 1-12.
- 2) 星野悦子, 井上映子, 峯馨, 國清恭子, 齋藤 やよい. 看護系社会人大学院生の学習上の克服課題と学習継続の条件. The Kitakanto Medical Journal. 2005; 55(4): 337-346.
- 3) 阪本恵子. 働きながら学ぶ学生の仕事と学業の両立の要因: 看護系社会人大学院修士課程に学ぶ学生の分析をとおして. 人間と科学: 県立広島大学保健福祉学部誌. 2006; 6(1): 91-104.
- 4) 中山登志子, 舟島なをみ, 定廣和香子, 横山京子, 松田安弘, 鈴木美和, 他. 大学院看護学研究科博士後期課程に在籍する学生の博士論文作成過程の経験. 千葉看護学会会誌. 2015; 21(1): 33-42.
- 5) 金谷悦子, 舟島なをみ, 望月美知代. 大学院看護学研究科修士課程に在籍する学生の修士論文作成過程の経験に関する研究. 千葉看護学会会誌. 2015; 21(1): 43-51.
- 6) 木下康仁. ライブ講義M-GTA グランデッド・セオリーアプローチ. 東京: 弘文堂; 2007.
- 7) 木下康仁. グランデッド・セオリーアプローチの実践. 89-91. 東京: 弘文堂; 2003.
- 8) 三輪建二. 成人教育学と看護教育—成人学習者への学習支援論. 上智大学総合人間科学部看護学科紀要. 2017; (3): 3-13.
- 9) 青山和加子, 巽あさみ. 産業保健師活動に活かされた看護系大学院研究科修士課程

(博士前期課程)での学習経験の構造概念
化. 産業衛生学雑誌. 2017; 59(1): 9-18.

- 10) シャラン・B. メリアム, ローズマリー・
S. カファレラ. 立田慶裕, 三輪建二. 成人期
の学習—理論と実践—: Learning in
Adulthood-A Comprehensive Guide. 273-
274. 東京: 鳳書房; 2005.
- 11) 渡邊洋子. 成人教育学の基本原則と提起
—職業人教育への示唆—. 医学教育. 2007;
38(3): 151-160.